

## 鷲見郷から高鷲へ拓く力(3)

【馬淵 作成】

【会報 高鷲の文化財】100号の続き

### 4 近代 続き

高鷲村は山が深く雪も多い村で、冬の作物栽培は出来ない土地である。おまけに一人当たりの耕地面積は少なく、農業だけに頼って暮らしが成り立たない。明治時代から北海道への移住が盛んになり、口減らしが行われた。

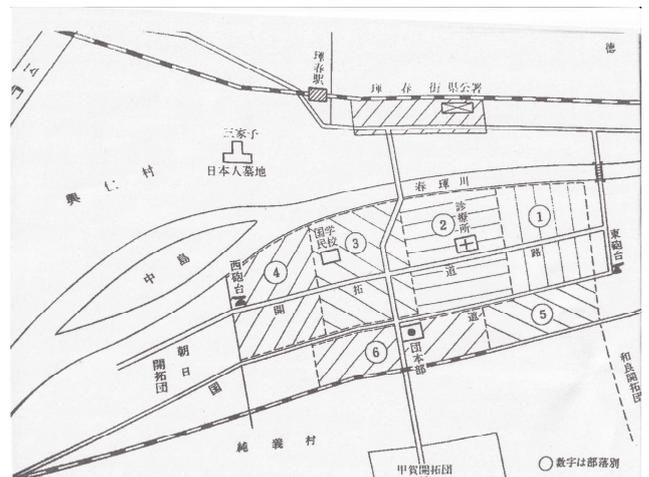
昭和になっても林業の生産は極めて少なく、特に主食については反当たり 2.8 俵と少なく、毎年相当量移入し続けていた。この窮乏から脱するため昭和 9(1934)年、国は農村経済更生計画の施策を順次全国各町村に対し指導、高鷲村もその計画に沿うことになった。続いて昭和 13(1938)年特別更生助成村の指定を受けて、経済自立に向かった。昭和 13年、14年頃より軍事目標に合わせて適正規模農家の創設を行うには、大陸進出以外に他の方法がないとの気運が高まり、政府の経済更生政策の一環に載ったのです。そのような時に、県開拓課の田中・岡崎両氏が来村され、満州の実情について詳細にわたり説明された。当時の農会長野村孝太郎は、満州に渡って視察を行い、帰村後直ちに分村計画をたてた。その計画は村の総戸数 700 戸のうち 200 戸を琿春に送出する、つまり村の人口を組織的に 2 分して一方を送り出し、残る母村の一戸当たりの耕地を増やす「分村移民」が強力に進めた。これは農村の相対的過剰人口に対する棄民政策だとも云える。さらにこれを実現するため、昭和 15(1940)年 2 月野村農会長は 70 歳の老体であったが、内原（現水戸市）の内地開拓訓練所に入所・訓練を受けられた。

内原で訓練を終えて帰村した野村農会長を団長とする先遣隊 23 名は、一応八幡の凌霜塾で短期訓練を受け、4 月 5 日出発に当たり大鷲白山神社に参拝し前途の成功を祈願しました。4 月 10 日には、現地琿春県純義村図魯屯に到着し、「大陸高鷲村開拓団」の標柱を打ち建て、国策を背負う意気込みと民族的優越感を抱いて、満州開拓の第一歩を踏み出した。

琿春は高鷲村と違い見渡す限りの平原で、一戸に水田用として 3 ha、畑用としては 3 ha の土地を貰い、開拓を始めた。開拓団は、部落ごとに分けて部落長を置き、本部には団長をはじめ、農事指導員、経理指導員、畜産指導員を置いて相談を受けたり、指導をした。また、学校も作り、診療所も作った。作物は米、大豆、燕麦、稗、野菜、馬鈴薯、レントコーン、麻で、畜産にも力を入れ、北海道の農業のやり方をまねした。

昭和 21 年 9 月 1 日に日本への帰国命令が出て、難民収容所から間島・吉林・新京を經由してコロ島に泊まり、10 月 21 日に船で九州の博多港へ上陸し、10 月 23 日に岐阜へ帰った。

開拓団の人は、ほとんどの人が自分の家や土地を処分して再び高鷲に帰ってこようとは思わなかった。帰国者は一時、浄勝寺に收容され、食糧や衣類の支給を受け身の振り方を考えた。そして土岐市の蘭仙開拓地へ入植するもの、蛭ヶ野開拓地へ入植するもの、身寄りに世話を頼むもの、北海道下川町へ帰る者、などそれぞれ身の振り方を考えて別れた。



琿春高鷲開拓団住宅配置図

## 5 現代

昭和 20 年 8 月 15 日、日本の敗戦によって日中戦争は終わった。その後、戦災者や引揚者たちの生活をどうするかが問題となり、そのために各地で土地の開拓がおこなわれ、高鷲村では蛭ヶ野地区 580 町歩、鷲見上野地区 440 町歩、切立地区 230 町歩の開発計画が県より示され食糧問題と失業問題を解決しようとした。りょうそうじゅく

蛭ヶ野の入植開拓(72 戸)は、昭和 15(1940)年、「凌霜塾」が蛭ヶ野に「大日道場」を作って開拓を始めたのが戦前の開拓第一歩である。戦後は引揚者が中心となって蛭ヶ野開拓が行われた。特に郡上村開拓団の人達は郡上郡の出身者の人達で、農野谷に入り、集団合宿をしながら土地を開墾し、その中の一部の人達は「板橋」へ入って開墾した。高鷲村出身の人達(環春高鷲開拓団)は国道に東側へ入り、1 戸につき約 3.8ha の土地を与えられたが、板橋地区は国道から離れており、6ha あまりの土地が与えられた。開拓の仕事は、道路や水路、ため池などを作ったり、生活するための住宅や田畑を切り開く仕事がある。開墾に使われた農具は、初めの頃はほとんど手農具で、開墾が進むにつれて「開墾ぐわ」という特大の重い農具を使って作業を進めた。昭和 24 年～ 25 年には牛馬が使われるようになり「プラウ」(鋤)なども見られるようになり、昭和 28 年頃にははじめてブルドーザーが一台借りられるようになり、開墾作業は大いに進んだ。

鷲見上野は上野高原と言われる昔から農業を行うには不向きな「かや草」「家畜のふみ草」「薪」などを取ったりする大切な入会地であった。また明治時代までは白川街道として向鷲見から上野、上野から荘川村の野々俣へ通じる道があり、美濃と飛騨をつなぐ大切な道でした。戦前から少しずつ鷲見の人達が耕作していたが、昭和 21 年 7 人の被災者達が上野に入植した。「焼き畑」で稗や粟を作ったり、馬鈴薯を植えたりしてわずかに耕作をしながら、道路を作る開拓の仕事をした。

ようやく三年後の昭和 26 年 9 月にため池を作る許可が出て、大工事が始まりました。工事は昭和 32 年に完成し、上野地区の田畑を支えてくれた。この工事のおかげで水田が増え、そのおかげで「稗飯」が少なくなり「米の飯」が多くなった。昭和 29 年頃より入植者が増え、結婚する人・子供のいる家が増え、ようやく村らしくなってきた。丁度その頃、酪農や大根作りが始った。荘川村の日照開拓農業協同組合・大日開拓農業協同組合・切立開拓農業協同組合が一緒になって「大日山麓乳牛育成組合」を組織して乳牛を入れ、その育成を始めました。昭和 31 年 1 月には始めて牛乳が採れたが、一升瓶に詰めて大鷲地区の各農家へ配達し、雪道を毎日運ぶのが大変であった。

昭和 40 年には安定した販売ルートをつくるため森永乳業と契約を結び出荷したが、国道から離れているため牛乳カンを運び出荷する苦労があるために、同年には、全長 7km に及ぶパイプラインを上野から集乳所のある穴洞まで施設して運用を開始した。だが、昭和 45 年にはパイプラインの老朽化と除雪技術の高度化によるトラック輸送の普及によって使われなくなった。今では一年中集乳トラックが入り、新鮮な質の良い牛乳を運んでいる。

一方、大根作りは昭和 29 年に「漬け物用」として作られ、この年に「大根加工場」が作られ、「漬け物用」として神戸市場へ出荷されたのが最初でした。その後しばらくは「漬け物用」として出荷されたが、昭和 34 年の伊勢湾台風によって大根加工場が壊されたために「漬け物用」から「生食大根」に切り替えということになり、生食大根の生産に取りかかり、岐阜・名古屋市場に販路を拡大した。その後、大根栽培農家は増加し、高鷲村高冷地野菜生産組合を結成し、生産・出荷・対イオウ病など色々研究し努力をして、販路を大阪市場まで拡大した。昭和 54 年には中日農業賞、農林水産大臣賞や農林水産祭で天皇杯を受けるようになった。

昭和 40 年頃から高鷲村には様々な観光施設が作られ、スキー場・ゴルフ場・テニスコート・ラグビー場・レジャー施設等です。そのうちの多くが冬のスキー客です。高鷲村では農業に立脚した観光立村を目指した。その結果スキー場及び民宿と大根農家の労働時期が違うため、お互い補完関係となり、高鷲村は大きく発展していった。

高鷲村では、牛乳の白、大根の白、スキー場の雪の白を合わせて三白産業といい、村の発展の原動力になった。



上野の大根畑